

発達障害児のケアについて

新田 収^{1,2)}

発達障害として、自閉症スペクトラム障害 (ASD)、注意欠如多動障害 (ADHD)、限局性学習障害 (SLD)、発達性協調運動障害 (DCD) の4疾患を取り上げることが多くなっています。これら4疾患は、隣接する障害と考えられます。つまり、症状が重複し、完全に分離できません。実際に、どの程度の重なりがあるかについては、ADHDの約30~50%に発達性協調運動障害が併存し、限局性学習障害では50%に併存し、自閉症スペクトラム障害については約40%に併存がするといわれています。現在の発達障害の概念が定着する前は「微細脳機能障害」というものがありました。定型発達の子どもと変わらずに成長しますが、成長に伴い特異なキャラクターを示すようになります。こうした子どもたちは、脳の器質的な微細脳障害があるために、特異なキャラクターを示すと考えたのです。微細脳機能障害は、現在の発達障害と重なる概念です。微細脳機能障害の神経学的な徴候として、発達性協調運動障害も含まれていました。発達障害の発症についてはまだ不明な点が多くあります。ただし、すべてが微細脳機能障害という概念に関係しており、これにより生じる問題を別々な形で4つに分けたの

が、ASD、ADHD、SLD、DCDともいえます。つまり、発達障害のこともは、総じて姿勢の不安定さと、運動の苦手さを、程度の差はあれ持っていると言えます。なお姿勢の不安定さは、静的なバランス、つまり座位や立位姿勢の悪さを示し、運動の苦手さは、動的バランスの悪さを示しています。

感覚異常は4疾患に共通してみられる特徴です。人は、感覚により自身がおかれている環境を認識します。また自身の身体状況についても、感覚を通して把握します。発達障害は、感覚異常が要因となった、発達上の障害と考えることもできます。彼らの感覚は非常に過敏であるため、日常の刺激が不快な刺激となり、不安になることがあります。例えば、雨が皮膚にあたる刺激が、毛穴に針を刺されるように感じたり、昼間の光が、まぶしくて、街の様子がハレーションを起こし、白くぼんやりした像としてしかみえなかったりします。発達障害の子どもたちの日常は、まるで真夏の浜辺で、厳しい太陽の日差しのもと、隠れる影もなく、必死に目を閉じ、うずくまっているような状態ともいえます。このような状況であれば、身の回りの様子を、冷静に捉えることなどはとてもできません。

¹⁾ アール医療専門職大学リハビリテーション学部

²⁾ 東京都立大学名誉教授

発達障害の姿勢の悪さにも、感覚異常が強く影響しています。姿勢の安定には、筋収縮を制御する脳が、効果的に機能していることが必要です。立位や座位などの姿勢を制御(保持)するには、複数の感覚も深く関連しています。その中でも特に平衡感覚が重要です。平衡感覚とは、床面に対して両眼および両耳を結ぶ線が平衡であること、あるいはその線が重力方向に対して垂直であることを感じとる感覚です。平衡感覚というと、耳の奥にある三半規管の前庭感覚を思い浮かべる人も多いかと思います。しかし、平衡感覚は前庭感覚だけでなく、視覚も重要です。身体は、視覚によって水平を感じます。例えば、水平線や、地平線を視覚的に確認することで平衡を

感じます。ちなみに船酔いするのは、揺れる船室内で床の水平と重力から感じる水平が異なるために脳が混乱してしまうからです。平衡感覚でもう一つ重要なのは、体性感覚です。体性感覚とは、触覚、痛覚、圧覚などの表在感覚と、筋がどの程度伸長されているかを感じる深部感覚のことを呼びます。特に平衡感覚としては、体性感覚により足部の圧によって身体重心の位置を感じることができるので大切な情報源の一つです。これらの前庭感覚、視覚、体性感覚からの情報を大脳皮質に送り、それらを統合して平衡感覚を感じています。発達障害をもつ子どもは感覚異常があるために、平衡感覚が、正確に機能することができません。

連絡先：新田 収
〒 300-0032 茨城県土浦市湖北 2 丁目 12 番地 31 号
TEL：029-824-7611